

令和7年度 地理分野 飛騨市立古川中学校 防災教育

第2学年「防災学習 ～第2学年東北地方(岩手県大槌町)の学習を通して～」

1. 実践の概要

(1) 目的

被災地固有の伝承モニュメントに着目した防災教育プログラムを実践する。単なる知識の伝達に留まらず、生徒たちが「なぜその形で伝承されているのか」という問いを通じて主体的に思考し、未来の防災行動への意識を高めることを目的とする。

(2) 対象・日付

古川中学校 第2学年生徒(137名)

A組…10月31日(金) B組…10月30日(木) C組…10月29日(水) D組…10月29日(水)

2. 授業実践

(1) ねらい

東日本大震災の経験を後世に伝えるために、地域の方があえて壊れやすい「木碑」を用いている背景や思いを考察する。この学習を通して、震災の記憶を後世に継承するためには、人々の「二度と繰り返してはならない」という強い意思と、その意思に付随する具体的な行動が不可欠であることに気付くことができる。



(2) 授業の様子

大槌町には「木碑」が設置されている現状を紹介し、「なぜ石ではなく、わざわざ腐食しやすく壊れやすい木材が使われているのか？」という問いを設定した。生徒たちは、「なぜ木なんだ?」「風化させないってどういうこと?」と木碑に関して疑問を持っている様子だった。また、仲間と交流する中で建て替えという行動をくり返すことで、震災の記憶を次の世代へ伝えていくことの重要性に気づくことができた。また、震災の記憶を後世にしっかり伝えるためには、自分たちの「二度と繰り返してはならない」という強い気持ちと、実際に行動することが欠かせない、という大切な教訓を学ぶことができた。

生徒の振り返りから

- ・「震災の教訓を後世に伝えたい、未来の災害を少なくしたい」などの災害の教訓を残す強い意志を木碑から感じる事ができた。また、自分たちのようになってほしくないから、自分たちが震災を伝えていく活動をしていることがわかった。
- ・自分たちも1年生のときに、防災の学習をしたので、自分たちもできることがあると思う。

3. 成果と課題

- ◎「なぜ石碑ではなく木碑なのか」という疑問を起点に、受け身ではなく主体的に学習に取り組むことができた。
- ▲大槌町から学んだ「行動として記憶を継承する」という教訓を、生徒たちが具体的な防災行動へと結びつけられるよう、来年度以降も継続的な学習プログラムを構築していく必要がある。